
 《 英語学科主催講演会 みんなで考えよう、就活の謎マナー 》 

日時	2021年12月10日(金曜)13:35-15:15
開催方法	W204教室/Zoomのハイブリッド開催
ゲスト	水野優望さん他、署名チーム「#就活セクシズムをやめて就職活動のスタイルに多様性を保証してください！」より計3名
参加者	本学学生、教職員、約30名
内容	<p>大学を卒業してすぐ企業などに就職して働きたいなら、大学3年生頃から就職活動(就活)を始めるのが現在の日本の通例です。そして就活には男女別にかなり細かなマナーがあって、髪型、服装、立居振る舞いに至るまで、望ましいとされる型に合わせることも通例です。しかしながら、性別が「男・女」の二枠(性別二元論)に収まるものではないことも知られるようになってきました。この講演会では、性の多様性や人権という観点から、現状の就活にはどんな問題があり、どう変えていくことができるかを考えました。ゲストにお招きしたのは、署名活動をされている水野優望さん他2名の方々です。署名はchange.orgで現在も行われており、2020年11月の開始以来、1万7千人が賛同しています。</p> <p>講演の冒頭では、開催側からの趣旨説明のあと、水野さんたちに自己紹介と署名活動の紹介をしていただきました。ご自分の就活時に一律的なマナーに強い違和感を覚えたこと、そして#KuToo運動に関わる中で自分も声をあげていいと実感できたことが、署名活動の立ち上げにつながったそうです。</p> <p>続いて開催側から、前もって獨協生や獨協教職員から集めた体験談や質問の報告があり、それを受けて水野さんたちにコメントをいただきました。体験談からは、就活だけでなく、アルバイトや就職後の配属などの場面や日常的な場面においても、性別二元論など、ジェンダーやセクシュアリティをめぐる不文律のさまざまな前提があることがうかがえました。就活生に周囲はどんな言葉がけがいいののでしょうかという質問に、そのまま性別二元論をなぞるのではなく、本当はおかしいよねと付け足してほしい、最終決定権はその人にあることを強調してほしいという答えも示唆に富むものでした。</p>
学生の声	<p>☆ 改めて性に関する議論は難しく、何が正解なのだろうと考えさせられる良い機会でした。ジェンダーに関する問題が頻繁に議論されたりするのは、やはり男か女かという二元論的な考え方が古くから人々に根付いているからだと改めて感じました。自分もまだまだ理解が足りないし、二元論的思考は深く自分の中に根付いていると分かる貴重な機会でした。性についての議論が高まっている世の中、そしてこの時代に生きているので、「自分の価値観」や「世の中の当たり前」を疑い、様々な視点で物事を見ることのできる人間に成長していきたいです。(参加者)</p> <p>☆ 「就活」になったとたんにはまらなくてはいけない風潮に対し、「そういうもの」と思って生きてきましたが、その風潮に心の底から苦しめられている存在も少なくないことに気づかされました。ただその考え方も人によってさまざまだと思います。本来働く人材を求める企業側と働く場所を求める学生側のマッチングであるはずの「就活」とはどうあるべきなのか考えさせられました。はじめは就活生という立場で話を聞いていましたが、働いてからの自分ができることは何だろうと考える、いいきっかけにもなりました。(司会)</p> <p>☆ イベントを通じて、署名チームの皆様、及び他の参加学生の皆様と就活の問題点や悩みを共有し、共に考えることができたということは、とても有意義だったと感じています。性差別的な指南に従う必要はないとは理解しつつも、就職難や卒業後に待ち受ける奨学金の返済等から由来する就活生の立場の弱さを鑑みると、就活生個々人が「マナー」から外れた行動をとるということは簡単ではないと身をもって実感しております。一方で、今回の講演会のように個人の枠組みを越えて他者と連帯すること、連帯のための場を設けること、自分に合ったアクションの起こし方を模索するということは、就活生当事者だとしてもできることだと考えました。講演会の開催に際して、お力添えを頂いた先生や職員の方々、就活の問題点について声を挙げて下さった方々に、心より感謝しております。就活が本格的に始まる時期となってきましたが、今一度、現状の就活における性の多様性、一人ひとりの人権について一緒に考えましょう。(司会)</p>